

A 語句の意味と読み

(1) 御覧ず／「見る」の尊敬語で「ご覧になる」／サ行変格活用。作者から二位殿への敬意を表す

(2) ふだん・かねてから・以前から／×「一日中」ではない。数日という意味になることもある語

(3) ねぶ／大人びる・年のわりに成長して見える／バ行上二段活用。八歳なのに大人びて立派だった、という文脈

(4) 尼君への親しみをこめた呼びかけ。ここでは祖母である二位殿を「おばあさま」と呼んだもの。／八歳の天皇の言葉。幼さと無邪気さが伝わる呼び方

(5) どこ・どちらの方へ／場所・方向をたずねる語。「いづちへ」で「どこへ」

(6) 天子・天皇のこと／「万乗」は兵車一万台を出せる大国の君主、つまり天子を表す語

(7) はかり知れないほど深い（長い）こと／「尋」は両手を左右に広げた長さ。ここは海の深さをいう

B 文法

(8) 補助動詞（謙譲の補助動詞「奉る」の連用形・ラ行四段活用）。／動作の受け手である主上を高めている。「奉りて」は本文により「奉つて」と促音便になる形もある

(9) 打消意志（～まい・決して～するつもりはない）。／主語が一人称「我が身」なので意志。※打消推量と説明する教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせる

(10) 尊敬の助動詞「さす」の連用形「させ」＋尊敬の補助動詞「給ふ」の連用形「給ひ」。二重敬語（最高敬語）という。／使役の相手が出てこないので使役ではない。天皇など最高位の人に用いる

(11) 意志（～しよう）。「～むとす」で「～しようとする」。「われをば」の「を」は動作の対象。連れて行かれるのが「われ」＝天皇で、連れて行こうとしているのは呼びかけられた尼ぜ（二位殿）。その二位殿の意志をたずねている

(12) 完了の助動詞「ぬ」の終止形。「～てしまった」の意。／直前が連用形「給ひ」だから完了。打消「ず」の連体形「ぬ」なら未然形に付く

(13) 係り結び。係助詞「ぞ」を受けて、文末が連体形「給ふ」で結ばれている。強意を表す。／ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形

C 指す内容・敬意の方向

(14) 作者から主上（安徳天皇）への敬意。／地の文なので敬意の主は作者。謙譲語は動作の受け手を高める

(15) 安徳天皇（主上）／「尼ぜ」と呼びかけているのが八歳の天皇本人

(16) 二位殿から、連れて行かれる主上（安徳天皇）への敬意。／会話文なので敬意の主は話し手。「参らす」は謙譲の補助動詞で受け手を高める

(17) 二位殿（二位の尼）。安徳天皇を抱いたまま海に入った。／天皇の動作には「させ給ふ」と二重敬語が使われているのに、ここは「給ふ」一つ。敬語の重さが主語を見分ける手がかりになる

D 口語訳

(18) ふだんから（こうなったら、と）覚悟していっちゃった／「思しめす」は「思ふ」の尊敬語、「まうく」は前もって用意する・心づもりをする

(19) 敵の手にはかかるまい（敵につかまったりはするまい）／「まじ」を「～まい」と訳す。直前の「我が身は女なりとも」とつながって読む

(20) 私をどこへ連れて行こうとするのか。／「具す」＝連れて行く・伴う。「ぞ」は疑問の意を強める

(21) 波の下にも都がございますよ。（本文の字のまま「浪」と書いてもよい）／「都の」の「の」は主格で「都が」。「さぶらふ」＝ございます・あります（丁寧語）。ここを「お仕えする」と訳さない

E 内容・記述

(22) 敵の手にかかる前に天皇のお供をして海に身を投げること。(二十七字) / 直後の「敵の手にはかかるまじ。君の御供に参るなり」が根拠

(23) 前世で十の善い戒めを行った功德の力によって天子に生まれた、と説明している。(三十七字) / 「～の御力によつて、今万乗の主とは生まれさせ給へども」という形をおさえる。前世の行いが今の身の上を決めるという仏教の考え方(因果応報)にもとづく言い方

(24) 東＝伊勢大神宮にお別れを申し上げる。西＝極楽浄土の来迎を願って念仏を唱える。(三十八字) / 東＝神へのいとまごい／西＝念仏、の順。天皇はこのとおりに行う

(25) これから沈む海の底も都だと言いかえて、何も知らない幼い天皇を慰めるため。(三十六字) / 直後に「慰め奉りて」とあるのが手がかり。天皇は「あされたる御様」で事情がのみこめていない

F 文学史・思想

(26) 神璽＝三種の神器の一つで、勾玉(八尺瓊勾玉／やさかにのまがたま)のこと。三種の神器＝八咫鏡(やたのかがみ)・八尺瓊勾玉(神璽)・草薙剣(くさなぎのつるぎ＝本文の「宝剣」)。 / 皇位のしるし。二位殿は神璽と宝剣を身につけて入水する

(27) 粟粒をまき散らしたような、小さくへんぴな国という意味。仏教の世界観からみた日本を指す。 / 「この国は粟散辺地とて」の「この国」＝日本。極楽浄土と対比している

(28) 『平家物語』／鎌倉時代／軍記物語。 / 琵琶法師が語り伝えた。「諸行無常・盛者必衰」が全体の主題で、この場面はその象徴といえる

【現代語訳(全文)】

源氏の兵たちが、もう平家の船に乗り移ってしまったので、(船をこぐ)水手や(かじをとる)梶取たちは、射殺され、斬り殺されて、船を立て直すこともできず、船底に倒れ伏してしまった。

二位殿はこの有様をご覧になって、ふだんから(こうなったら、と)覚悟していらっしゃったことなので、にぶい灰色の二枚重ねの衣を頭からかぶり、練絹の袴のすそを高くたくし上げてはさみ、神璽(＝三種の神器の勾玉)を脇にはさみ、宝剣を腰にさし、天皇を抱き申し上げて、「私の身は女であっても、敵の手にはかかるまい。天皇のお供に参るのだ。私を慕ってくださる人々は、急いで後に続きなさい」と言って、船端へ歩み出られた。

天皇は、今年は八歳におなりであったけれども、お年のわりにずっと大人びていらっしゃって、お姿は美しく、あたりも照り輝くばかりである。御髪は黒くゆらゆらとして、お背中の下まで届いていらっしゃった。(天皇は)あつけにとられたご様子で、「尼ぜ(＝おばあさま)、私をどこへ連れて行こうとするのか」とおっしゃったので、

二位殿は、幼い天皇に向かい申し上げて、涙をおさえて申し上げたことには、「あなたさま(＝天皇)は、まだご存じでいらっしゃらないのですか。前世で十の善い戒めを守り行われたお力によって、今、天子としてお生まれになりましたけれども、悪い縁に引かれて、御運はもう尽きておしまいになりました。まず東に向かわれて、伊勢大神宮にお別れを申し上げなされ、そのあと、西に向かわれて、極楽浄土からのお迎えにあずかろうとお思ひになって、お念仏をお唱えなさいませ。この国は粟散辺地(＝粟粒をまき散らしたような小さくへんぴな国)といって、つらい所でございますから、極楽浄土という素晴らしい所へお連れ申し上げるのですよ」と、泣く泣く申し上げなされたので、

(天皇は)山鳩色のお召し物に、びんづらを結っていらっしゃって、お涙にむせびながら、小さくかわいらしいお手を合わせ、まず東を伏し拝んで、伊勢大神宮にお別れを申し上げなされ、そのあと、西に向かわれて、お念仏をお唱えになったので、二位殿はすぐに(天皇を)抱き申し上げて、「波の下にも都がございますよ」とお慰め申し上げて、千尋(＝はかり知れないほど深い海)の底へとお入りになる。